**降誕前第７主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年11月10日**

**「神とその恵みの言葉とにゆだねる」**

**創世記22章8節**

 **22:8 アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。**

**使徒言行録20章17～38節**

 **20:17 パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。**

 **20:18 長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。**

 **20:19 すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。**

 **20:20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。**

 **20:21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。**

 **20:22 そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。**

 **20:23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。**

 **20:24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。**

 **20:25 そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。**

 **20:26 だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。**

 **20:27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。**

 **20:28 どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。**

 **20:29 わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。**

 **20:30 また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。**

 **20:31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。**

 **20:32 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。**

 **20:33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。**

 **20:34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。**

 **20:35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」**

 **20:36 このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。**

 **20:37 人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。**

 **20:38 特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。**

1.

**私たちは主日礼拝で使徒言行録から共に主の御言葉を聞いています。少し間が空きましたが、パウロの第3次伝道旅行ももう間もなく終わりを迎えます。先の個所ではパウロはできれば五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので旅を急いだことが記されています。そして本当はエフェソの教会に寄って最後の別れをしたかったのですが、それをすると五旬祭までにエルサレムに到着できない、だからエフェソには寄らないで旅を進めようと判断したのです。**

**ただやはりパウロはエフェソの教会に相当強い思い入れがありますので、何とかして最後の別れをしたいと思い、ミレトスから人をやってエフェソの教会の長老たち（この長老たちとは教会の指導者全般のことです）を呼び寄せたのです。エフェソからミレトスまで約50キロあると言われています。エフェソに人をやる、エフェソの長老たちがミレトスに駆けつける、往復100キロですからこれだけでも数日は要するわけですが、やはりパウロはどうしてもエフェソの教会の長老たちと最後のお別れがしたかったのです。**

**パウロはエフェソの町でユダヤ人の激しい迫害に遭いながらもイエス・キリストの十字架と復活の福音をユダヤ人にもギリシア人にも宣べ伝えてきました。いうなれば、道を宣べ伝えてきたのです。神の道、キリストの道を精一杯宣べ伝えてきたまずそのことを語ります。そして今、パウロは投獄と苦難が待ち構えているにもかかわらずエルサレムに向かいます。それは決してパウロの人間的な思いではなくて「聖霊に促されて」自分の決められた道を走りとおすのだ。聖霊が導き主が共に歩んで下さる自分の決められた道を走りとおし、福音を力強く宣べ伝えることができるならこの命すら惜しいとは思わないとパウロはその覚悟を語ります。**

**パウロはさらに語ります。25節です。**

**「そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。」これがこの地上での最後の別れであることは十分に承知していると述べるのです。**

**28節。**

**「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。」**

**神の教会の世話をさせる、これは教会が神を神として礼拝して、きちんと神の道を歩むために「聖霊が」あなたたちをお立てになったのです。神の道を迷い出たり違う道を歩む者がいないか「あなたがた自身と群れ全体に気を配ってください」というのです。教会の人々だけでなく「あなたがた自身に」と語るところがパウロの素晴らしいところだと思います。聖霊がお立てになった教会の指導者たちあなたたちこそが常に神を神として礼拝しているか、ともすれば自分が神になっていないか、神の道を外れていないかを常に吟味しなさいと述べるのです。それは残忍な狼どもが外から入り込んでくるだけでなく、あなたがた自身の中から残忍な狼となり、神の道を荒らす者、道を迷わせようとする者、自分を神のごとき自分に従わせる者が必ず現れると警告をするのです。だから、私が3年間教えてきたことをいつも心に留めて目を覚ましていなさいと言うのです。**

**パウロは32節でこのように語ります。**

**「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。」「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。」そう、これこそがパウロが一番伝えたいことです。**

**パウロとしては3年間滞在して非常に思い入れのあるエフェソの教会の長老たちです。本当はあれも気をつけなさい、これも気をつけなさい、色々言いたいことはあるでしょう。何しろもう二度と会うことができないとわかっているのですから、パウロの遺言としてあれもこれも伝えたいはずです。でも、パウロは何が一番大切なのか分っていました。それが「神とその恵みの言葉とにゆだねる」ということです。神様と神様の恵みの言葉とに信頼して全てをおゆだねして、エフェソの教会をお任せしたのです。**

**それはこの恵みの言葉はあなたがたつまり教会を造り上げるからです。教会が恵みの御言葉によって立つからなのです。さらに御言葉は主の恵みを受け継がせることができるからです。御言葉を信じて受け入れる者は主の恵みの相続者として歩むことができる。神の子とされるからです。**

**最後にパウロは弱いものを助けることと、イエス様の言葉「受けるよりは与える方が幸いである」を行うように勧めてこの別れの説教を結びました。パウロもエフェソの教会の長老たちも一緒にひざまずいて祈り激しく泣いたのです。そしてパウロは涙をぬぐって自分の決められた道を聖霊の導きによって歩んでいくのです。**

**本日の旧約聖書の箇所は、神様から愛する息子のイサクを焼き尽くすささげものとしてささげなさいと命じられたアブラハムがイサクと共に神様に命じられた場所に向かう途中での会話です。火と薪はあるのに肝心の焼き尽くすささげものがないことに疑問を感じたイサクが父アブラハムに問うた答えです。**

**「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。**

**二人の会話はこれで終わります。二人は無言で神様が命じる山に向かいます。アブラハムはもちろん、これ以上問わないイサクも神様に全てをおゆだねして一歩一歩とその道を歩んでいったのです。「主の山に備えあり」私たちの主体である主が必ず備えて下さる、そのことを信じてどこまでも神様におゆだねして道を歩むのです。神様はその信頼に応えるかのように神様が一匹の雄羊を備えていてくださり、アブラハムはその一匹の雄羊を焼き尽くすささげものとしてささげたのです。**

**神様を信じて神様に全てをお委ねすることの大切さこれが今日の聖書箇所が私たちに語りかけていることです。そして、今日の説教題にしている新約聖書の言葉はこうです。「神とその恵みの言葉とにゆだねる」です。パウロがエフェソの教会を神様とその恵みの御言葉とにゆだねたのです。神様にゆだねただけでなく、その恵みの言葉とにゆだねたのです。では、パウロが言った「神とその恵みの御言葉に教会をゆだねる」とはいったいどういうことでしょうか。**

**この「ゆだねる」という言葉はもともとの言葉では「側に置く」とか「前に置く」という意味の言葉です。家族のために愛情込めて作った手料理をその家族の前に「どうぞ召し上がれ」と置くのです。一緒に自分の分も作っていたら別ですが、「どうぞ」と相手の前に置いた料理は自分の手を離れます。相手が「おいしい」と言おうが「おいしくない」と言おうが、調味料をたくさんかけようがその相手にゆだねるしかありません。そのように相手の前に置いて自分の手を離れてしまうことがゆだねるなのです。**

**そして、このゆだねるがある場面で使われています。それがイエス様が十字架上で死を遂げられる場面です。ルカによる福音書23：46**

**「イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。」**

**イエス様はご自身の霊を神様の前に置いてご自分の手を離れて全てを神様にゆだねられたのです。私たちの罪を贖うためにご自分の命を捨てて全てを神様におゆだねになられたのです。そして神様は3日目にイエス様を復活させられたのです。福音です。私たちを生かし、永遠の命を与えてくださる、私は復活であり、命である。私を信じる者は死んでも生きる。私たちの命の御言葉、恵みの御言葉それはイエス・キリストです。そして、イエス様の十字架と復活の愛と恵みを表す福音が聖書の御言葉なのです。そこに教会の全てをおゆだねするのです。**

**私たちが教会を建て上げるのではありません。神様が、イエス様が、十字架と復活の恵みの御言葉が教会を建て上げるのです。教会は私たちの所有物ではありません。教会の頭はイエス・キリストです。教会を自分の所有物であるかのようにぎゅっと離さないとなると、それは教会を私たちの思いで建てようとすることになり、決してゆだねることにはならないのです。それはともすれば私たちが残忍な狼や邪説を唱えて道を迷わせようとする者になってしまうのです。**

**私たちに大切なことは、神様とイエス様とイエス様の十字架と復活の福音の愛と恵みの御言葉に全てをおゆだねして、感謝して祈りつつ私たちが受けたイエス様の十字架と復活の福音の愛と恵みの御言葉を周りの人々に与えていくことです。**